

悲しみから生まれる力

— 仏教文学の現代性 —

I 仏教に流れる悲しみの音調

グリーンフ、死別の悲しみと日本の宗教との関係を考える際、仏教そのものが悲しみというものと深いかわりがある、そうしたところから考えていく必要があると思う。そして、普通仏教は苦しみという人間の条件の克服を主題としていると理解されるのであるが、悲しみから力を生み出していくという機能、芸術作品にもそういった機能はあるが、そういう事柄として理解することもできる。とりわけ仏教の根本である「無常」を知ることが人間の成熟のひとつの証と考えられていた、それを日本の伝統の中で見直してみたい。そもそもそれは、あらゆる宗教、世界の文化に共通して見られるものだが、それを日本の文化に即して理解することを試みたい。

普通日本のマスコミは宗教を取り上げない。取り上げるときは何かスキャンダル、宗教が悪いことをしたときばかりなのだが、今回の震災ではポジティブな意味で宗教が新聞紙面、テレビなどに出てきた。これは阪神大震災のときはそうでもなかった。大都市と地方ということも大きな違いだと思う。たとえば若い僧侶が死者の霊のために読経するというようなことがポジティブな、心に慰めを与えるものとしてニュースになった。また、四十九日の節目

島 菌 進

には、全国の真言宗の僧侶が相馬市に来て、合同慰霊祭、法要を行った。それがスポーツ紙のニュースになっている。この世に無念を残されたと思う、せめて安らかに旅立っていただきたい、そういう気持ちを誰でも持つている。しかし、その時に読経がないと何か収まらない。そこには、仏教の力が大いに期待されているということである。

日本の仏教の無常観というものは、よく知られ、日本の文学史を学べば必ず出てくる。『平家物語』の冒頭部でもいいし、このたびは『方丈記』がよく思い出されるようである。

ゆく河のながれはたえずして、しかもゝとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたはかつきえかつむすびて、ひさしくとゞまる事なし。世中にある人と栖と又かくのごとし。

本家が全部流されてしまった、その光景を見て、そしてその中で多くの人が亡くなっていったという津波の情景を見ると、二二〇〇年前後に鴨長明が源平の争乱の中で感じたであろうことが蘇ってくるように思う。京都の下鴨神社の神職として育ったが、人が殺しあう世のはかなさを強く感じていた。自然災害も当然背景にあった。世が治まらないということとは災害が起ることが結びついて受け止められる。これは仏教的にも儒教的にも世の乱れ、天地のリズムの乱れというものは精神が乱れているということの結果と考えられていたかと思う。

無常というものが日本人に親しみ深いというのは、「いろは歌」を考えても理解しやすいところだ。これは、空海が作ったのだというのは伝説で、一〇七九年の文献が最初だというように普通は出てくるが、そのすぐ後に覚鑿という新義真言宗の創始者の注釈なども出ている。諸行無常偈という涅槃経の偈の意味をとって日本語にしたものとされている。

色は匂えど散りぬるを 我が世誰ぞ常ならむ 有為の奥山今日越えて 浅き夢見し酔ひもせず

この「浅き夢見し酔ひもせず」「有為の奥山今日越えて」というのは、この世のはかなさを痛切に自覚するが故に

仏道の道をしつかり歩もうという覚悟を述べている。これは仏教の教えの本流になつたものと普通は理解されていると思う。諸行無常偈というのも「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」というように涅槃のほうへ向かつていく、いわばこの世を超越していく歩みということが、この無常ということの本来の教えである。あらゆるものは移り変わるものであるがゆえにそれに執着すべきではない、そこから離れて永遠のもの、真の安らぎ、解脱へと向かつていくのだというのが無常とめぐる本来の教説ということになる。実際に、被災地を歩いてみて、お墓も洗い流されて中には骨壺もない、このお墓を再建するということが可能なのであろうかと感じた。おそらく人が住む場所にはならないのではないか、市街の場合も人が去ってしまった所に再び帰つてくるか分らない、これが「無常」だと思つたということを伺う。「無常」ということが被災地を通るとつくづく感じられる。しかし、東北のたとえば大槌町とか南三陸町とか本当にすべて洗い流されてしまったような所から少し山に入ると、まことに自然が美しい。その無残さと自然の偉大な恵みというものの対照というものが、大変悲しくもあり、大いなるものを感じさせられ、宗教的な気持ちにならざるを得ないということがある。

このように「無常」というものは悲しみであり悲しみと深い関わりがあるというのは当然のことであるが、そういった目で仏伝を見直してみたい。仏教学的に理解すると、仏教はどうして始まつたのか、ふつう「苦」についての教説が示される。ゴータマ・ブツダがどういう悟りを得たのかという説明があるが、どうも物足りないと感じる。たとえば、増谷文雄『仏陀―その生涯と思想』（角川書店、一九六九年）には、

へわれらは、生・老・病・死・愁・悲・憂・惱の中に沈んでいる。苦に沈淪し、苦に包圍せられている。その苦の積集を滅しつくさんがために、われらはここにいたつたのである。／＼として釈尊は、出家しながらもなお俗世の欲望に心をひかれがちな若き比丘たちに、決然たる放棄を要求している……

増谷氏は、仏教の根本は「決然たる放棄」なのだと言う。この世が苦であることに目覚めてそれを振り棄てて偉大な真理の方へ向かっていくのだというふうに述べている。しかし、何があったのだろうか。幸せな家族を棄て、妻と子供を棄て、あるいは王であれば統治者としての責任を棄て、ある日突然出家をする。妻と子からすればなぜ出家したのか。冷たいではないかと問われるかも知れない。これは山折哲雄氏なども注意を促しているところだ。山折氏の場合、ガンディーの例が背景にある、ガンディーがある時期からブラフマチャリア、すなわち禁欲生活に入り妻子に冷たくなり、ガンディーの子どもは長く恨んでいたという。それと同じような目で仏陀の出家というようなものを見直してはどうか。

たとえば、早島鏡正氏『人類の知的遺産3 ゴータマ・ブッダ』（講談社、一九七九年）では、お母さま、マーマー夫人が亡くなったということ、これはただ亡くなったということが伝えられているとある。だが、これを文学的に理解すると、このことに深い意味を見てもよいのではないか。つまり、大事な親を失った悲しみ、母を失った悲しみ、そして喪失に向き合いながら生きるというようなことが仏道修行というもののひとつの大きなきかけになっていると考えてもいいのか。というのは、日本の宗教史を見ると、親を失った、母を失ったということが大いなるものとの出会いに繋がっている、あるいは一生を懸けた修道、道を歩むということに通じているという例が多々見られるからだ。代表的な人物をひとりあげると明恵である。

Ⅱ 明恵と悲しみから生まれる憧れ

明恵は大変な才能を持った仏教者であるが、紀州有田郡の豪族に生まれた。戦乱の時代に生まれ、八歳で母を亡くし、同じ年に父が戦死した。明恵が厳しく批判した法然も少し時代は前ではあるが、同じように争いで父を亡く

して仏道に入っている。八歳、九歳という年齢で仏道に入る、そして故郷を去る。その悲しみを明恵は鮮烈に表現した。だが、道元、親鸞、日蓮のように弟子のための教えの言葉をたくさん残したわけではない。もちろん弟子の育成に努めたが、しかし、自らの心を表現する文学者のセンスを豊かに持った人物としての言葉が多く残っている。短歌もたいへん印象に残る短歌を残している。

高尾の神護寺は京都の北の方だが、今、紅葉の名所で観光客も多い。その次に槇尾、梶尾というのがあり三尾と呼ばれている。最初神護寺に入り、これは空海や最澄に縁があり、そして、自分の親戚がそこに入っていた。しかし、その後には、梶尾の高山寺で修業した。この高山寺というのは、今行くと本当に深い山で今はあまり建物は残っておらず、国宝級の仏像等がいろいろあったところだが、非常に寂しい場所である。主にそこで、和歌山県の有田の山の中で修業した。真言密教の修行者であると同時に華嚴の学者でもあり、当時の華嚴学の大家でもあった。そういった大学者であり、瞑想を深く実践したが、その情熱というのは、親を失ったということに発するということをあからさまに表現している。次のものは明恵が弟子に語ったことをもとにした「梶尾明恵上人伝記」からのものである。

九歳にして、八月に親類に放れて、既に高尾山に登せらる。何と無く古郷の名残惜しく覚えて、泣々馬に乗りて行くに、鳴滝と云ふ河を渡るに、馬立ち留りて水を飲まんとするを、手綱を少し引きたれば、歩々水を飲むを見て思ふ様は……

馬が、人が引つ張ると水を飲みながらもそれに従順に従っている。馬でさえ人のことを思って、行きたくない思いを振り捨てているのだと。

畜生とて拙き者だにも、人の心を知りて、行くところ思ふらめ、留らずして、歩みながら水を飲むらめ、我、父母の遺命に依りて入寺する、一旦親類の名残惜しければとて、泣かるゝ事のうたてさよ。

こんなところで泣いているわけにはいかない。亡くなった親のことが思われてならない。故郷を離れることはつらいことだが、それよりも亡き親を思つて仏道を歩まねばならない。一心に仏道の方にわが身を向ける。そういつたことを誓っている。心中に願を發す。これが發心、菩提心であつて彼が法然を批判したのは、專修念仏というのは菩提心を否定するもので、仏教の根本に反するということであつた。明恵はその菩提心の出どころは自分の悲しみだということを明確に表現している。

亦自然戯れ咲（わら）ふ事有るにも、若し父母三途に入りて、若患をや受くらん。是を助けずして、何事を快くしてか戯咲すべき。若し又中有にありて、我を見る事有らば、別れを歎かずして、放逸に歓樂して戯咲すと見えん事恥かしく覺えて、仮にも戯咲する事無かりき。

子供なので何だかんだと言つておしゃべりして笑つている。笑つていてもまだ両親はどこに生まれ変わつているのか分らない。もしかして、苦界にいるのではないかと、その両親のためにも修行をしなければならぬ。それぐらいの強い決意をもつて仏道修行に励んだ人物であつた。

「樹上座禪図」といつて弟子が描いた明恵の図がある。明恵は月の歌が多くあり、もちろん月というのは満月は悟りを表している。「あかあかや あかあかあかや あかあかや あかあかあかや あかあかあかや」というような歌もある。遊びで作つているので、有名な歌のもじり（本歌取）のようなものが多いが、しかし、そこに深い情熱が表現されている。要するに雲に憧れる、月に憧れる。そして、自分が月と一体になつたような気になれるというような歌も多くある。この月を見て瞑想をしていて我を忘れてしまうようなことをあからさまに表現する人物だつた。そして、釈尊を慕うあまりに唐に行き、天竺に行くことを願つた。これは菜西のような人物や道元もそうであつた。とにかくインドへ行つて本当の釈迦に近づきたい。禪は釈迦そのものの後を追ひ、ひたすらそのまねびをするとい

うことなので、それと同じ精神が明恵にもあった。断念するのだが、次のようなことを述べている（「却廢忘記」）。

ワレハ天竺ナドニ生マ（レ）シカバ、何事モセザラマシ。只五竺ニ処タノ御遺跡巡礼シテ、心ハユカシテハ、如來ヲミタテマスル心地シテ、学門行モヨモセジトオボユ

インドへ行ったら、お釈迦様の近くに來たということで、嬉しくてしようがなくお釈迦様の遺跡を回っているだけで満足してしまうだろう。そうしたら、学問もしないし、行もしなかつただろうと、だからこれでよかつたのだと述べている。

ずっと手元から離さなかつた仏眼仏母像というのがある。これは、曼陀羅の中にある普通さほどは尊ばれないが、しかし、そこから諸仏が生まれてくるという意味をもつた仏様である。この仏様を明恵は非常に大事にしていた。この像の両側に贊があり、仏様であるが母である。大いなる母であると書いてある。「モロトモニアハレトヲボセミ仏ヨキミヨリホカニシル人モナシ」と本当に仏と一体になって恍惚となっている。「哀愍我、生々世々不暫離／母御前」と仏様であるが、母である。「南無母御前／＼釈迦如来滅後遺法御愛子成弁紀州山中乞者敬白」この成弁というのは高弁とともに明恵の別名である。なので、自分はお釈迦さまが残した子供であるとまで言っている。このように母を慕う気持ちと仏様を慕う気持ちが重ね合わされている。そのように自分の悲しみの気持ちを徹底して憧れの気持ちに変えて一生を生きた。明恵の仏道も文学的にはそうした形で理解できる。

そういった姿勢が、日本の仏教の根本にある。なぜ出家をし、菩提心というものにしたがつて徹底的に修行するのかということについてこの点を見ることができない。というのは日本の仏教は、その後大きく流れを変えて、むしろこの世に帰って來るといふ流れを取った。つまり、無常を知って向こうへいく。有為を越えて無為の世界を求めるといふ道を明恵は徹底して行なおうとした。だが、こちらの世界にあつてこそ、仏道は生きるといふか、そうせざる

を得ないというか、そういうことが確かにある。

もともと悲しみというのは愛があつてその愛が満たされないで悲しみが生まれる。母に対する愛が溢れてしまつて、悲しみを持て余すということかと思ふ。人は死ぬ時には、自分が持つてゐる愛を全て投げ出さなくてはならない。そのことの悲しさに潰れるような気持ちになる。そういうことを考えると、愛と悲しみというのは不可分の関係、愛の挫折が悲しみ、これはフロイト的な解釈でもある。しかし、悲しみをこの世への愛の方へもう一度戻していくという姿勢が日本の仏教は強かつた。これは要するに、「小乗仏教」的なこの世から向こう側へという精神の動きに対して、もう一度こちら側へ還つてくるといふ大乘仏教的な傾向が日本では徹底して進んだといえるかもしれない。こういうしたことと関わつて「うき世」といふ言葉が広まつた。

III 無常とうき世

日本の仏教、あるいは日本の仏教文学において「うき世」は大事な言葉となつた。そういうた解釈がある。このもとなる考察のひとつは、唐木順三氏が行つた日本人の無常観への批判だ。戦後の日本人が戦争の敗北を経て、あらゆる自信を失つた。多くの命も失われ、自分の持つていたものが役に立たなかつたことを知つた。世界的に見ても大變な殺戮が世界を覆い、人間がそうしたことを行つたのだということから深刻な実存的な自己反省というのが起こつた。そういう目で「無常」といふものを見ると、本来の無常観といふものは人間の弱さといふものを徹底してみることと関わりがあるはずである。あるいは、世界のはかなさといふことを十二分に自覚することが元になるはずだ。

ところが、唐木順三氏は日本人の無常といふのは、美学的なものにならずんであるといふ。無常は「もののあはれ」

でもあるが、悲しいといつて楽しんでるというようにお互い慰め合いもたれ合っている。これが、日本の無常をめぐる文学であり、仏教に大いに関わっているが仏教の重要な洞察をなにか和らげてしまっている。それを、徹底して仏教の方へもう一度戻そうとしたのは道元だと、道元の無常理解こそが本物だと唐木順三氏は述べている（『無常』筑摩書房、一九六五年）。

事実日本の短歌というものは、花を詠い、桜はまさに無常を表現している。命の短さを表現しているが、同時に美しさを愛でて、そして散ってしまったて悲しい悲しいと言ってお酒を飲んで喜んでお花見をしている。それが、日本の美意識だとすると、これは本当の悟りに向かう気持ちには遠いのではないか。無常美観であつて、はかなし共同体はかないはかないと言ってお互い慰め合つて、そこで終つてしまつて、それ以上進まない。こういう無常観、場合によつては感ずるの感を書いて無常感とした方がよい。「本当に見る」という意味であきらめるという、本来の意味の無常観ではないという唐木氏の議論があつた。

我々は演歌まで続いているかは分からないが、悲しいということをお互いに語り合つて、堪能するというような文化を持つている。これは、わびさびという美意識にも繋がるのかもしれない。それは、日本仏教にそもそもそういう傾向があつたのではないか。この世をどこか安易に肯定するような仏教、徹底した否定というのが進まない。天台本覚論というものがそうであり、あるいは即身成仏というような考えがあつたり、山川草木悉皆成仏というような考えがでてきたりと、そういったものの基盤は日本の仏教の中には実は初めからあつた。

つまり、戒律をしっかりと守る僧侶の集団、サンガが成り立たない中で、檀越を庶民に求めて、俗な生活の方へ向かつていく。それを代表するのが、「聖」というものであつて、日本の仏教はある時期から聖の仏教というものが導くようになった。法然上人も山を下りて聖になった。聖は二重出家だというように言う人もいる。一旦出家した仏

門があまりに俗っぽいのでそこからもう一度出てくる。では、二重出家すると、向こう側の世界へ本当に行けるのかというと、高野聖のような世界の中にはそういった徹底したこの世の放棄といった話も出てくるが、多くの人は檀越を求めて勸進、唱導というふうなことをする。つまり、聖の文化、遁世僧の文化では勸進、唱導が重要だと、これは五来重氏（『増補高野聖』角川書店、一九六五年）が指摘している。五来氏は、西行の歌を見ると、孤独に山の中に籠っていた、あるいは独りで旅をしていたというように見えるが実はそうではない。高野聖なので勸進に忙しい、それで芸能に関わったり短歌も作る、短歌を作れば女性たちもたくさんいる裕福な貴族とまじり合い交流し合う、そういった世界にいたのだと指摘している。そういった仏教が日本の仏教の本流になった。その仏教を唐木氏のようにだからだめなのだとか切り捨ててよいものか。この世を肯定してしまつて、本来の仏道を失ってしまったのだというのではなく、そこにこそ日本の仏教の味わいがあるのだと説いたのが橋本峰雄氏である。

橋本氏は、うき世というのは最初は憂き世であり、この世は憂い、憂しであり、まさに無常でありはかないから仏道へ入るといふ否定的なものとしてこの世が出てくる。ところが、それが肯定的な意味に変わつて来る、この世のはかない短い命だけは楽しもうというようになってくる。江戸時代にそれが全盛になり、井原西鶴が浮世草子というふうなものを書くなど憂き世から浮き世へ変化があると一応は言える。そして、その浮き世という意識が室町時代から江戸時代にかけて庶民化していくと指摘する（『うき世』の思想』講談社現代新書、一九七五年）。たとえば、一五二八年の『閑吟集』には、

たゞ何事もかごとくも、ゆめまぼろしや水のあわ、さゝの葉にをく露のまに、あじきなやの世や

夢幻（ゆめまぼろし）や南無三寶

くすむ人は見られぬ、ゆめのくく世を、うつゝがほして

なにせうぞ、くすんで、一期は夢よ、たゞ狂へ

前半を見ると、この世ははかないからただ棄ててしまおうと言うかに見えるが、最後の「たゞ狂へ」というのはだからここで、酔つて十分に楽しもうというようなことになる。

あすをも知らぬ、露の身を、責めて言葉を、うらやかに
（『閑吟集』）

誰か再び花さかん、あたゝ夢の間の、露の身に
（『隆達小歌集』）

そういうはかない時代だからこそ享樂して過ごしましよつと、これが浮き世ということになる。浅井了意というのは仏門の人であるが、まさに一六六一年刊の『浮世物語』というものを書いている。この主人公は仏門の出身なのだけれども、酒や女で遊び尽くして全てを失つてしまふ。ところが、それが後半では大名のご意見番になつて世の中の批評をするという話になつてゐる。この話の書き出しは次のようである。

世に住めば、なにはにつけて善悪を見聞く事、皆面白く、一寸先は闇なり。なんの糸瓜（へちま）の皮、思ひ置きは腹の病、当座くゝにやらして、月・雪・花・紅葉にうち向ひ、歌を歌ひ、酒飲み、浮に浮いて慰み、手前の擦切「無一物」も苦にならず。沈み入らぬ心立の水に流るゝ瓢箪の如くなる、これを浮世と名づくるなり。「思ひ置き」というのは、気に病むことである。一種無責任なようにも見える。そういつたことを平気で書いてゐる。しかし、これはいやいや人生というものはそういつたものだと浮き世はまさに世を渡るので、世を渡るといふことの中には、板子一枚隔てて死の領域が待つてゐるといふ意識も含まれる。そのように人生は危機の連続であるといふ意識がある。そういう意味で無常といふものを強く意識するがゆゑに浮世といふものも出てくるのだといふ。だから、日本人なりの、あるいは日本の文芸なりの仏道理解が背後にあると考へればよいのではないのか。そう考へると、近代文学というものも仏教的な死生観と反映してゐるとする見方ができるというのが橋本氏の捉え方である。

IV 一茶と悲しみをたたえたたたかき

小林一茶は、まさに悲しみをたたえて凶太く生き、うき世の生を歌った俳人であった。信濃の最も北の端の柏原の農家に生まれた。熱心な門徒が多いが、信州のお寺で教えるような教えは、相対化して彼は自分なりの仏道理解を持っている。それは江戸で苦勞して俳人として身を立てたという経歴の中で生み出したものだと思われる。とにかく二歳で母が亡くなり、継母がやってくるがやがて継母に男の子が生まれてしまう。そしてどうしてもうまくいかないということで、祖母が守ってくれたがその祖母も亡くなってしまう。そこで父がやむなく江戸に奉公へ出した。そこで一茶は苦勞に苦勞を重ねた末に、母を失い故郷を失った悲しみを俳句や俳文で表現した。たとえば、母を失って生きていかなくはならない悲しみの歌として、

しよんぼりと雀にさへもまま子哉

なでしこやまゝはゝ木々の日陰花

「はゝ木々」というのは箒のような灌木であるが、それに「まゝ」を付けて「まゝはゝ木々」というようなことを歌っている。「なでしこ」というのも「まゝはゝ木々」の日陰と見るはひがみの歌とも見ることができるところであり、弱い立場故の悲しさを露骨に歌っている。

我と来て遊べや親のない雀

これは子どもの時に作つたと言われているが実際にはそつてはない。

亡母（なきはは）や海見る度に見る度に

四十代で作つたもので、これはむしろ本当の自分の母について作つたというよりも、他の人の喪失に触発されて

出来たものと思われるが、一茶の一生を思わせる一句でもある。一茶の故郷から海が見えるところまで行くには、少し距離があった。江戸に来て一茶は大体北関東の千葉や茨城あたりで俳人の弟子を見つけた人物なので、その辺りの海の光景に触発されているのかもしれない。

当時の俳人とはどういうものであろうか。江戸は人口が百万という世界第一級の大都市であった。しかし、江戸時代は平和で生産力が上がったわりには、そもそも全国的にさほど人口が増えない。それは、災害がある、疫病がある、飢饉がある。江戸時代の人口が増えなかつたことが、エコロジ的に優れた社会であったという説もある。しかし、江戸はとにかく男が多い。男が多いと言いうことは、皆そこで何とか成功しようとするわけであるが、男が多いということは家庭が持てないという人が多い。江戸はそこへ人々を吸い込んでしまうような場所であり、そこで若死にしまうような人が多い。そうした環境で、俳句というのは芸人として世を渡っていく。パトロンを探し、自分の芸を磨いて何とか腕一本、表現力一本で生き抜いていくようなことである。そういう中で一茶は人間の冷たさ、罪深さ、悪を避けられないあり方、これは浄土教の教えがもとにあるとも言えるし、仏道の基本にそういう思想があると思われるが、その自覚を強く持ったと思われる。

春立つや四十三年人の飯

耕さぬ罪もいくばく年の暮れ

士農工商の身分社会で芸能で暮らす人は、更にその下ということかもしれない。そういつた中で、役に立たないことをやって生きているという負い目の意識を強く持っていた。故郷の句がいくつもあつた。

ここから信濃の雪に降られけり

故郷や寄るもさはるも茨(ばら)の花

古郷は蠅すら人をきしにけり

老が身の直（ね） ぶみをさるゝけさの春

年寄りにはお金がかげられないし、何が役に立つのと問われているかとひがむ気持ちもわいてしまう。江戸時代の現在から見れば平安な世を生きていく中で一茶は弱い立場の者の悲しみを意識した。

花のかげ寝まし未来が恐ろしき

死後の審判を恐れているのであつて、つまり自分は良い人間として生きてきたと思つてはいないということである。人の厳しき、悪意、冷たさというものを十二分に体験したが、それに対抗する自分自身の悪というものもよく意識していた。一茶の親しい友人で二瓢という谷中の桜のきれいな本行寺の人も、

用のない人と言はれて夜寒かな

これは一茶ほど嫌みがないかたちで歌つている。一茶は生きるためには何でもしていかなくてはいけないという庶民の世界を小さい動物に託して歌つている。弱い動物が多く出てくるが、それは同時に強い動物でもある。

うつくしやせうじの穴の天川

連れて来て飯を食（くわ）する女猫哉

これは女猫が子どもの猫を連れて来て一緒に食べさせるといふほほえましくたましい生き物の姿だ。

鳩の恋鳥の恋や春の雨

春の雨で人が家に籠つて出て来ないが、家の中では愛が芽生えているのではないかという感じである。桜の句もあるが、先ほど述べたように桜の歌は、まさに無常の美観の典型であつた。一茶の場合はかなりひねりがある。俳句というものがそういった短歌的なべつたり感をはずした表現形式である。さらにもう一つ気取りをはずしている。

ほとんど川柳に近いという人もいる。

活て居る人をかぞへて花見哉

何でこんなに人がいるのだらうかと、花を見に来たのにと。しかし、その人たちももうすぐ死ぬかもしれないという感じである。何か冷めて厳しい生の現実を見ながら花見をしている。

咲きちるやけふも昔にならんずる

死支度致せ致せと桜哉

これらは、現代に説かれるところの死の準備教育みたいなことをそのまま言っている。

いざさらば死ゲイコせん花の陰

世の中は地獄の上の花見哉

花見をして皆樂しそうにしているが、家へ帰ってみるとどうなのであろうか、どうもひどくやっかいなことが待っているのではないかといったところだろう。このように世の中の苛酷なリアリティを見ながらその厳しい現実の中をかるうじて生きていく人間をやさしく見ている。そこに一茶の近代性があるのだと、フランス文学者であり詩人であった宗左近氏は述べている（『小林一茶』集英社新書、二〇〇〇年）。

春雨や喰はれ残りの鴨が鳴く

初雪や今に煮らるゝ豚遊ぶ

宗氏は次のように述べている。

それにしても、「喰はれ残りの鴨が鳴く」「今に煮らるゝ豚」にしろ、むろん、それらがそのままわが身だという自覚があつてのことです。その自覚のあつた文学者は、江戸の文化文政までに、むろん数多くいたに違い

ありません。しかし、それを表現したのは、おそらく一茶が初めてです。

こういうことを言つて「お互いそうだね」と言える、そういう自己意識の表現次元を一茶は切り拓いたと述べている。自らの世界を見出し、元氣な盛りの一茶は西日本に六年かけて旅をした。それは結局全国の俳人を訪ね芸を練り、また仲間を作り自分の評判を上げる。そうすると、番付の中で上がっていく。そういうようにして新しい自分の弟子ができるということだ。当然結婚は出来ない。だから、江戸にいる三十数年の間、一茶はひとり身であつた。そして、先輩の俳人に従い、豊かな商人等の俳人がパトロン役となる。そういう人に寄生したりしていた。

V 弱さ・罪深さの自覚と共鳴する力

一八〇二年、四十歳そこそこの時に帰省する。そもそも長い間帰省はしていない。これも縁かも分からないが、帰省したら父が病氣になつたと言われている。父の病氣の知らせを聞いて歸つたのではないか、という説もある。というのは、一茶は日記を残している。生きている間は出版はしなかつたが、やはり人に読まれることを前提とした日記がある。その中で、遺産争いのことが克明に書かれている。ここで、分割相続、半分遺産を貰うという約束を取りつけている。しかし、それが落着くまで何年もかかる。十三回忌になつて、ようやく腹違いの弟と和解をする。弟から見れば、一茶が家を出てから自分たちはたくさん土地をあげ得た。自分らの甲斐性でこれだけの土地を得た。それを江戸に出て全く農業をやつていなかつた兄貴になぜ半分もやらなくてはならないのだということである。しかし、父は息子に辛い目に合せたからだろうが、何とかさうしたいということがあつた。

やがて一茶は歸つて来て、一茶はその土地は全て小作に出して、基礎収入もあり、その近所にたくさん俳人の弟子がいる。そういう中で晩年は豊かに過ごした。五十歳で初めて結婚した。しかも二十八歳の女性と。

その継母や弟との争いについては詳細にわたる記述があり、近年は「父の終焉日記」という名前が付いている、父の病床での継母と義理の弟と二茶の三人のまことに醜い争いがそのまま書かれている（小林一茶『父の終焉日記・おらが春他一篇』岩波文庫、一九九二年）。

廿九日、父は病の重り給ふにつけて、孤（みなしご）の我身の行末を案じ給ひてんや、いさゝか（の）所領、はらからと二つ分にして与んとて、くるしき息の下より指図なし給ふに、「先中島てふ田と河原てふ所の田を弟に附属せん。」とありけるに、仙六、心に染さりけん、父の仰にぞぶく。其日、父と仙六いさかひして、事止め。皆、貪欲・邪智・諂曲に眼くらみて、かゝる息巻はおこりけり。

父は、自発的に半分ずつにしようと言ひ、弟は怒つたとある。大変な口論になつたとある。こうしたことが、罪の自覚、仏道の自覚の基礎にある。あさましいことであつた。この後、親の面倒をみるが、日記によると二茶がとてもい子で、父がそのようなことを言ったものだから、継母と仙六という弟は親の面倒もい加減だつたと延々と書いてある。二茶に対して父はやさしい言葉をかけるが、それをみるにつけても母は憎たらしくてしょうがない。「二従の戒めをわすれたり」と女性であるにも関わらず夫を叱るなどのことが書かれてある。

その父の「父の終焉日記」に書き込んだものは、『宝物集』という源平の争乱の時代に、鹿ヶ谷事件で鬼界ヶ島に流された平康頼が仏道に入り、帰つて来てから作つた仏教説話集からの引用が非常に多い。その当時、一茶は『宝物集』を参考書にしてそこに書かれている仏道を反芻していたと思われる。たとえば、このような話が出てくる。『宝物集』から抜き書きして、「父の終焉日記」に書いてあることである。

兄弟二人、親の病氣申来りければ、道近かれはやく立けれども、日ぐれたれば前後も見えず、道に塚穴ありければ、かゞみて居て明るを待けるに、一人は道遠くして、迹から来りけるに、其穴に落けるに、先に入たる子は、

鬼来り我くはんとすらんとふせぎ、迹から来る兎は、穴に鬼ありて我をあやむると、互ひに掴みあひけるに、夜明て見れば兄弟也。生死の闇に迷ひぬれば、皆無明の鬼なるべし。(中略) 万法空也と観ずれば、罪もなし、功德もなし。地獄もなく、極楽もなし。此観いたりぬれば、無始生死の罪ごとく消えて、つひに菩提の岸にいたる也。

兄弟二人で父が病氣になつたということで、それぞれに帰ろうとした。そして、先に行つた者が暗くなつたからといつて穴の中に入った。あとから来た子どもがその穴に落つこちてしまった。落つこちてしまつたら、そこに大變な鬼がいると思ひ、お互い掴み合いの大喧嘩になつたという話である。まさに、天台本覚論的な悟りかもしれないが、このなかには自分の罪の深さを理解して、相手を許す。そして、相手の醜さというものが見えていたときは、自分の醜さというものも見えている。そういった精神が表れているのではないか。

VI 子どもたちと妻の死を超えて

そういつた血みどろの戦いを経て晩年の幸せを二茶は得たが、その子どもたちは皆早く死んでしまつた。長男千太郎はひと月、長女さと『おらが春』の物語(後述)は一歳ちよつとで死んでしまつた。次男石太郎が生まれた後、自分は中風にかかる。そして、その次男は母の背中で窒息死してしまつた。こんな悲しいことがあるか。一茶は妻になぜこんなことが起こるのかと怒る。三男金三郎、そして妻の菊は死亡し、再婚するがその妻雪も離縁してしまふというように幸せではなかつた。しかし、次々に子どもが生まれて、男女のことにもおおらかであつた。だが、それは死別の悲しみと隣合わせだつた。『おらが春』こそが、まさに悲しみの文学の代表的なもの、グリーンフェアの代表的作品かもしれない。

こぞの夏、竹植る日のころうき節茂きうき世に生れたる娘、おろかにしてものにさとかれとて、名をさととよぶ。(中略)心のうち一点の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、なかなか心の皺を伸ばしぬ。

又、人の来りて、「わんわんはどこに。」といへば、犬に指(ゆびさ)し、「かあかあは。」と問へば、鳥にゆびさすさま、口もとより爪先迄、愛敬こぼれてあいらしく、いはゞ春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくな
ん覚え侍る。 (『おらが春』)

本当に幸せそのものであった。

這へ笑へ二つになるぞけふからは

これは正月だとすると、半年ぐらいであるがその頃のことである。ところが、

楽しみ極りて愁ひ起るは、うき世のならひなれど、いまだたのしびも半ならざる千代の小松の、二葉ばかりの笑ひ盛りなる緑り子を、寝耳に水のおし来るごとき、あら／＼しき痘(いも)の神に見込れ(中略)神は送り出したれど、益々よわりて、きのふよりけふは頼みすくなく、終に六月廿一日の朝顔の花と共に、此世をしぼみぬ。母は死に顔にすがりて、よ／＼と泣もむべなるかな。この期に及んでは、行水のふたゝび帰らず、散花の梢にもどらぬくいごとなどゝあきらめ顔しても、思ひ切がたきは、恩愛のきづな也けり。

露の世は露の世ながらさりながら

「千代の小松の、二葉ばかりの」というのは、緑のこれから発展していく、そして長い長い命を築しむべき存在が、疱瘡神に見込まれてしまった。神を送り出して、そして病気を治そうとする。疱瘡神を送るというのが、重要な治療法でもあるが、六月二十一日に亡くなってしまう。フィリップ・フォレストというフランス人の日本の文学に詳し

い学者で作家でもある人が『さりながら』という小説を書いている。この人は、自分の娘が三歳で亡くなってしまった。まさに一茶の「露の世は露の世ながらさりながら」の句を万感の思いをもって受け止め、自らの作品の表題とした。これは一茶だけではなく夏目漱石やほかの人のことも話題になっている小説だが、この句のフラン語訳からの日本語訳が出ている（フィリップ・フォレスト『さりながら』澤田直訳、白水社、二〇〇八年）。

私はこの世が 露のように儂いことを知っていた そうではあるのだが

『おらが春』の先を読むと、「さと女卅五日 墓」と書いてあるが、墓参りをしてそこでいくつもの句が引かれている。

秋風やむしりたがりし赤い花

露の玉つまんで見たるわらはかな

来山や落梧というのは他の俳人であるが、

愛子をうしなひて

春の夢気の違はぬがうらめしい 来山

子におくれたるころ

似た顔もあらば出て見ん一踊 落梧

家の前を子どもが通ると、ああ自分の子どもではないかと思つてついつい出てしまふという気持を表現したのではないかと思う。

一茶は晩年は経済的には幸せにはなつたが、悲しいことが続いた。結局三度目の結婚をしたやをにやたという子どもが生まれたが、その子が生まれる前に一茶は亡くなった。家を建て替えていて蔵に仮住まいして亡くなった。今もその蔵は残っている。

何もないが心安きよ涼しさよ

このような句を作っている。また、『おらが春』の結びは次のようになっていいる。これは蓮如の「御文」のパロディになっている。

問ていはく、いか様に心得たらんには、御流儀に叶ひ侍りなん。答ていはく、別に小むつかしき子細は不存候。

たゞ自力他力、何のかのいふ芥もくたを、さらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は、其身を如来の御前に投出して、地獄なりとも極楽なりとも、あなた様の御はからひ次第あそばされくださりませと、御頼み申ばかり也。(中略)是即、当流の安心とは申也。穴かしこ。

ともかくもあなた任せのとしの暮 五十七歳 一茶

「御流儀」は本願寺の御流儀であろう。だが、一茶の言葉はとても現世的で、「あなた任せのとしの暮」なので来年の経済はどうしようかという話である。この「あなた」はもちろん阿弥陀仏でもあるわけだが、ここでのべられているようなことは本願寺の教理からは疑問符がつくかもしれない。しかし、うき世の仏教からいうとそういうことになる。それこそ全てを投げ出すという、他力の極致ということになる。今、一茶の跡を訪ねてみると、一茶が住んでいた家の横に土産物屋があり、七代目の子孫がおられる。

一茶は、悲しみにくれ続けた人生で自分はいったい何の役に立ったのかとたびたび問いかけている。ほとんどヒリズムではないかという句がある。

蝶とぶや此世に望みないやうに

日が長い長いとむだな此世哉

永き日に身もだへするぞもつたいな

永き日や嬉涙にほろほると

そもそも人間は長い日をごんなにバタバタと暮らしているが、「永き日」こそが生きていることの本来の姿かもしれない。そういう時にこそ「もつたいたい」となる。「永き日や……」は、悲しみ極まって涙が出てくる、その涙は途切れた後でまた涙が出てくる。これは、感謝の涙であつたりするといふような境地ではないかと思う。

何も無いが心安さよ涼しさよ

涼風はあなた任せぞ墓の松

是がまあつひの栖か雪五尺

このあたりにはやすらぎの境地が出ている。これは、「悲しみ」というものを突き詰めた結果出てくる「やすらぎ」の境地というのも「茶の目指すところではなかったのかと思う。

今回の大震災で悲しみに暮れながら何とか新しい希望を見出そうとしているという現代日本人の精神と、うき世の悲しみとやすらぎを歌った「茶の境地を重ねて読むことができるのではないか。「悲しみから生れる力」を表現した日本の宗教文化に思いをいたしながら、被災地の復興をとともに願いたい。